

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷二十五第

月三年六十和昭

論 叢

經費支出の季節的調整……………經濟學博士 沙見三郎

戰爭經濟に關する一主張……………經濟學博士 松岡孝兒

中世イギリスの海運政策……………經濟學士 佐波宣平

景氣政策の問題とシニピイトホフの景氣理論……………經濟學士 青山秀夫

國際カルテルの諸問題……………經濟學士 靜田均

研 究

ハルムス世界經濟學とその周圍……………經濟學士 松井清

保險機構に於ける資本……………經濟學士 西藤雅夫

說 苑

コソホ・戰時租稅政策……………經濟學士 柏井象雄

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

國際カルテルの諸問題

靜田均

國際カルテルの經濟的效果に關しては、論者によつて評價を異にし、必ずしも一樣ではない。かつて國際聯盟は、國際カルテルが生産者ならびに消費者の何れに對しても多くの良き效果を齎らすことを強調して、左の諸點を指摘した。(一)生産と消費のよりよき適合、(二)販賣價格の相對的安定、(三)危險の減少、(四)生産費の低下、その結果たる價格の低廉によつて新しき購買者層を開拓する可能性、(五)中央本部の指導による、生産條件ならびに販賣條件等に關する有益な知識の獲得、例へば統計資料の蒐集および利用。かやうに一方においては國際カルテルの謳歌論がきかれるかと思ふと、他方においては國際カルテルの效果を極端に低く評價し、その無力を指摘する論者もある。例へばウィイヘンケルは、右の國際聯盟の説をもつて單に「綱領的性質」を有するにすぎず、實際的意義を有するのは(五)位のものだといひ、經驗の教へるところでは、生産と消費の適合は少數の場合にしか認められぬ、カルテルによる價格の安定には、たいてい價格の騰貴がつきものであり、それはアウト・サイダーの生産擴張を促し、またさらには企業の新設を齎らすと語つてゐる。

議論は明かに喰ひ違つて居り、あるひは正反對でさへあるやうだが、しかしいづれも楯の一面を觀るに急なるのあまり、充分に他を顧る餘裕に乏しく、ために前者はいさゝか過大評價に失し、後者は明かに過小評價に陥つ

た嫌ひがないではない。以下において私は、代表的な諸學者の見解を参照しつつ、國際カルテルの經濟的效果について考察を進めたいと思ふのであるが、それに先立つて二三注意すべき點を指摘しておくことは、あながち無益ではなからう。

第一は、國際カルテルの存續期間は概して國內カルテルよりも一層短い、といふことである。けだし、國際カルテルは資本の自己運動と國策との交叉點に立つからであり、各國における經濟の發展は、多かれ少かれ不均衡を呈するを免れぬからだ。解約の可能性は、すこぶる多い。

第二に、國際カルテルは法的な安固さと承認とを餘りに少ししかもたぬ、といふことである。それは國內カルテルが法的な強制をもちうるのと比べて、著しい相違だ。

第三に、國際カルテルの政策は、その指導者の見透しや動因に依存するところが多い。むしろ國內カルテルについても同じことはいへようが、世界市場においてはより廣大であるだけ、このことは一層強く當嵌まる。

第四にアウト・サイダーの問題がある。それは國內カルテルよりさらに切實な意義をもつ。アウト・サイダーの役割は、當該カルテルの構造と當該部門の特殊事情によつて條件づけられるがゆゑに、一概にはいへないけれども、戦後の國際カルテルが深刻なアウト・サイダーの問題に悩んだことは、たしかである。

以上は、總じて國際カルテルの効果を限界づける諸モメントに外ならない。これらのモメントは國際カルテルの効果をあまりに高く評價することの不當を教へるものであるが、さりとて國際カルテルの効果を抹殺しようとするのも、極端に失すること、贅言を要しないであらう。いづれにせよ、面的考察に陥ることは、嚴に戒めなければならぬ。

國際カルテルの經濟的效果は、いろいろあるであらう。またその評價は立場の如何によつて一樣ではあるまい。生産者の立場で考へると、消費者の立場で考へるとでは、おのづから異なるであらうし、また勞働者の立場から觀れば、別箇の議論が生ずるかも知れぬ。しかし、こゝでは我々の考察をたゞ次の二つの問題に限定しようと思ふ。第一は、國際カルテルはどの程度において當該商品の生産と消費、需給と供給との適合を齎らしうるかといふことであり、それはおのづから價格問題に觸れざるをえない。第二は、國際カルテルは生産ならびに販賣に關し、どの程度コストの引下げに役立つかといふことである。まづ第一の問題から考察して行かう。

國際カルテルにおいては、價格協定は今日のところ地域協定および生産協定にその地位をゆづつてゐる。そこでは生産が價格によつて影響されるのではない、むしろ生産統制および地域統制こそが價格に影響をおよぼすのである。³⁾ そもそも價格の下落は、つねに必ずしも市場の實勢をそのまま正確に反映するものではない。それは生産者の過度の競争によつて誇大化される。いはゆる破滅的競争なるものは、このことを語るものに外ならない。その結果、限界生産者は競争の圏外に放り出されるわけだ。カルテルの課題は、かうした自由競争に代つて計畫的生産、需給の適合を所期するにあり、需要を見出さぬやうな過剰の供給を除去せんとするところに横たはつてゐる。

實際問題として考へるに、國際競争の撤廢乃至制限は、國際カルテルに課せられた最も重要な任務である。需給適合の問題は、國內カルテルにとつても重要な問題であるが、國際カルテルにあつては、國內カルテル以上に重要性をもつ。さうしてこのことは、なかんづくウキーデンフェルドの強調するところであるが、國際聯盟の報

3) W. Seldis: Die Regelung der weltwirtschaftlichen, Produktion' durch internationale Kartelle in der Nachkriegszeit. 1936 S. 69, 70.
4) K. Wiedenfeld: Kartells and Combines. 1927.

告書もまた同様の見解を披瀝してゐる。いはく、『生産と消費との均衡を保つ價值と可能性とは、國內カルテルよりも國際カルテルにおいて遙かに大きな重要性を有す』⁵⁾と。

需給適合、換言すれば供給調節を目的とする國際カルテルとして、しばしば見られるところのものは、割當カルテルである。それは最小の需要見込額に適合するやう、カルテルの供給總額を定め、各メンバーの分擔すべき供給額を割當るものであつて、この點に關する限り、國內カルテルと何ら異るところはない。けれども割當額は通常、個々の企業の擴張に割せられた限度と見做すべきではなく、各メンバーは罰金を支拂つても、割當額以上の生産を行ひうる。しかも國際カルテルにあつては、そのため除名處分にあふやうなことはない。罰金さへ出せば、超過生産を認めるといふのが、國際カルテルの常道である。従つて各メンバーの考慮すべき問題は、協定の遵守に忠實であるかどうかにあるのではない。増産によつて得られる生産費の低下が、罰金を支拂つてなほあまりあるかが、重要な問題なのだ。このことは、國內カルテルにおいても見られることではあるが、特に國際カルテルにおいて注意さるべきキイ・ポイントである⁶⁾。

しかし、國內市場における需要が増加した場合、割當の増加を認めるといふことを、出發點においてあらかじめ協定する國際カルテルも存在する。さうした場合、各メンバーは國內における加工業の發展に強い關心をもち、外國市場にはより少い關心しか拂はない。原料部門にカルテルの成立してゐるほどの國ならば、完成品工業部門もまた相當の發展をとげ、生産費も安いのが普通だからである。けれども右の規定は、カルテル化された商品が國內において生産せず、またその不利をカバーするに足るだけの何らか有利な條件を具備せざる國における完成品工業の發展を阻害するに相違ない。けだし、この種の國における完成品工業は、高い生産費を伴ふことを

5) League of Nations: International Industrial Agreements. p. 18.

6) K. Wiedenfeld: Cartels and Combines. 1927 p. 31.

免れぬであらうから。

國際カルテル協定が、異なる市場の相互保障のみを目的とするときは、供給の問題は、本質的には國內カルテルの場合と同じである。しかしながら國際カルテルは、世界中のすべての重要生産者を網羅しえないといふ弱點を有するが故に、強力な獨占的地位をしめることはない。のみならず、國際カルテルの内部においても、生産費を出來るだけ切詰めることは、加盟者にとつて利益であるから、そこに競争の餘地がある。従つて販路を見出す限り、強ひてわざ／＼供給を制限することはないわけである。

つぎに國際カルテル協定が、加盟者各自の國內市場のみに適用され、第三國市場に及ばぬ場合には、加盟者にとつては、外國市場よりも國內市場を重視することが利益となる。なぜなら、固定設備を有し、間接費の重壓下にある企業は、保護なき市場において不斷の動搖にさらされるよりも、加工業の發展による國內市場の開拓に望みを囑するのが當然だからである。

いづれにせよ、供給の問題は、價格決定の問題に歸着する。國際協定の成立の結果、國內市場が外國の生産者から防衛されるとすれば、國內カルテルの價格決定力が強化されることは、疑ひをいれぬ。國際カルテルは國內カルテルの地位を強化し、その價格吊上げを掩護するといふ非難は、必ずしも失當ではない。この場合には、國內における當該商品の生産費が、實際において價格決定の要因となる。さうしてそれは、最高の關稅保護でさへがなし得ざることである。

國際カルテルに對してしば／＼加へられる論難の一つは、それが生産を人爲的に制限して價格の不當なる吊上げをはかる、といふことである。たしかにかうした努力は、ある種の商品(例へばゴムの如き)のために過去におい

て行はれたに相違ない。しかし、その企圖は多くの場合、發案者の期待を裏切つてむしろ失敗の歴史を残した。といふのは、一時は價格の騰貴を齎しても、やがてアウト・サイダーの擡頭を促し、激烈な競争を惹起するがゆゑに、結局、價格の崩落を招ぐからである。

しかし、合理的な割當制度に立脚せる國際カルテルは、さうした失態をさらすことはない。價格の吊上げはカルテルの目的ではなく、市場狀況への適應こそがカルテルの目的であると稱するのは、不合理な供給制限による人爲的な價格吊上げ政策が、カルテルをかへつて短命に終らしめることを指摘する限りにおいて、正しいといふことが出來よう。呉れなくも注意を要するのは、不採算的な低價格を引上げると引合つてゐる價格をさらに引上げるのを混同してはならぬ、といふことである。後の場合には非難に値するであらうが、前の場合には何ら非難に値するやうなことはない。極端な低價格は市場の實勢に對應するものではない。むしろ過度の競争によつて激化され、需要も價格の低下を見込んで、實勢以下に減退し、萎縮することがある。かゝる場合、自由競争に委ねたまゝ自然的な均衡の恢復を待つよりも、カルテルによる生産統制がよりよく需給の適合を齎らすことは、容易に首肯しうるところである。

カルテルはしばしば價格吊上げのゆゑをもつて非難をうけるけれども、時としてカルテルの下にかへつて價格の低下せる事例もないではない。例へば國際電球カルテル、國際アルミニウム・カルテルにおけるが如し。けれども、原則としてカルテルが價格を引上げる傾向のあることは、否定できない。けだし、出發點がすでにあまりにも低い價格だからである。

カルテルが高價格政策に成功したとしても、それはおそらく一時的たることを免れぬであらう。高價格が販賣

の可能性を狭めざる限りにおいては、毫もカルテル・メンバーの利益とはならぬ。價格の動搖また然り。巨大な生産設備を擁し、繼續的な販賣を必要とする部門において、このことは特に重要である。總じてカルテルの市場における地位は、せい／＼いはゆる相對的獨占到すぎない。それは決して競争から自由ではありえないのである。高價格は新しい競争者を喚び起すか、或は古い競争者を刺戟するであらう。かくしてアウト・サイダーの激烈な價格闘争が始まる。かうしたカルテルはみづから墓穴を掘るにひとしい。その適例は一九二六年に結成されたアメリカを中心とする國際銅カルテルに見られる。投機的な高價格政策は、カルテルの小兒病に外ならない。カルテルの統制技術が老巧であればあるほど、無暴な價格吊上げ政策は避けられる。

この點に關聯して一言を要するのは、代用品の競争といふことである。合理的な價格における有效な代用品の提供は、カルテル商品に對する消費者需要の弾力性を増加する。代用品の價格が低ければ低いほど、カルテル商品の價格は引下げられざるを得ない。すなはちカルテル商品と代用品との價格差が、兩者の相對的効率の價值差以上にのぼらぬことを要する。原料生産者の國際カルテルは、自然的基礎に基づく獨占力をもつ。それは中間消費者たる製造業者に對しても、完成品の最終消費者に對しても危険でありうる。しかし、原料が二つ又はそれ以上の別箇の方法で生産される場合（例へば窒素における智利硝石、合成窒素、製鐵業の副産物、ゴムにおける天然ゴム、再生ゴム、合成ゴム）には、それらすべてを網羅した國際カルテルの成立することは困難であり、その間の競争は免れ難い。

國際カルテルは、當該商品の價格を安定せしめるか。しば／＼提起されるこの問題に答へるには、先づ次の二つの點に注意を喚起しなければならぬ。第一は、もし經濟情勢の現實に觸れぬ不聰明な非科學的な政策を追求し

たならば、獨占的な國際カルテルでさへ、價格を安定させることは及びもつかない、といふことである。第二は、價格の釘付けと價格の安定とは別物であるから、兩者を混同してはならぬ、といふことである。價格の安定とは、單純に價格の下落を阻止することではない。眞の安定政策は、價格變動の振幅を縮小することを目的としなければならぬ。以上の二點を念頭におき、さらに國際カルテルの多くが世界産額の大部分を統制してゐないといふ既述の事實を併せ考へるならば、國際カルテルが當該商品の價格安定を實現しうるか否かは、思ひ半ばにすぎることがあるであらう。

まづ生産統制を伴はぬ單なる價格統制は、もしそれによつて價格が生産者に有利な水準に固定されるとすれば、カルテル・メンバーおよびアウト・サイダーの生産の増加を刺激する傾向がある。むしろ、しばらくの間ならカルテルは價格をその水準に維持することが出来る。しかしストックが累増し、そして新しい捌け口が速かに見出されるか、或は現在の世界の生産が制限されるかするでなければ、商品の過剰は遅かれ早かれ必ずや價格の崩落を持ち來たすに相違ない。如何なる國際カルテルといへども、巨大なる且つ累増するストックを無期限に維持するだけの金融力はもつてゐないからである。

他方、生産制限の行はれた結果、ストックが減少した場合、もし需要の急激なる増加ありとすれば、生産者はごく短期間に生産を増加することが出来ないから、商品の顯著なる不足は、さしづめ價格を奔騰せしめるであらう。かういふことは、世界市場においてはよくありがちなことである。ところでかゝる事態を防止するには、當該國際カルテルがつねに急場の間に合ふだけのストックを用意しておかねばならぬ。しかし一般にはこの種の計畫をもたぬのが普通だ。それはストックの維持のために、少からぬ経費がかゝり、價格騰貴のチャンスと異常な

る高利潤が實際に消し飛んでしまふからである。

これを要するに、賢明なる價格政策および生産政策がとられるならば、カルテルそれ自體の地位が安定する。そしてカルテルが長期にわたつて存続する見込があるならば、然らざる場合に比べて、價格により大なる安定を與へることが出来るであらう。これに反して、カルテルが崩壊の危機にあると認められるか、又は信ぜられるかするならば、或はカルテルの形成または更新のため協議が起るとするならば、一般に價格不安を増進することは、免がれぬところである。

三

カルテルが當該商品の費用の低下に役立つか否かについては、從來しばしば懐疑的な批評が加へられて來た。

第一は、カルテル・メンバーが割當てられた生産高だけの商品を利潤を得て販賣する保障を與へられるところから、彼等の製造方法を改善し、近代科學の技術的發明を利用する主要の動機を奪はれないかといふ疑問であり、第二はカルテルが最も低能率の工場の費用價格に基づいて販賣價格を決定する傾きがあるがゆゑに、そのメンバーから生産方法を改善するあらゆる誘因を失はしめないかといふ疑問である。

これに對してカルテル辯護論者はいふ。なるほどカルテル・メンバーは、割當額以内で自己の販賣高を確保しさへすればよいやうなものゝ、費用を節約すれば、その分だけ自己の利益となることは、間違ひない。ところでカルテルは有期限のものであるから、費用の低下といふことは、各メンバーにとつて至大の關心事である。協定が満期に近づくとき、一般にその延長をめざして協議が行はれるわけであるが、技術的進歩におくれをとつたものは、次の新しい協定において自己の地位を守ることは、困難である。また新協定が成立しないでカルテルが崩壊

したとすれば、猛烈な競争が始まることは必定であつて、その場合、右の業者の地位は大いなる危険にさらされるに相違ない。さらに協定が有効であるとしても、加盟者の大多數がより優秀な技術を有する以上、カルテル商品の価格は多數者の生産費によつて決定され易いから、従つて技術の劣つたメンバーは、損失を忍ばねばならぬ場合さへあるであらう。のみならず、價格の引下げによつて顧客を維持し、または獲得する手段を奪はれてゐるとすれば、各カルテル・メンバーは技術の改善によつて自己の製品の品質を向上せしめ、かくしてその目的を達しようとする努力することも考へられるところである。

以上の諸點よりして、國際聯盟の經濟委員は、カルテルが決して技術の停頓を齎らすものでないことを力説するのであるが、しかし生産の合理化は、より緊密な結合であるところのコンツェルンやトラストにおいて徹底的であることを認める。コンツェルンやトラストにあつては、金融上の相互依存の關係や共通の管理がそれらの企業の生産を特殊化し、最良の條件のもとに生産しつゝある比較的設備の優秀な工場に生産を集中することを可能ならしめるからだ。生産過程の合理化による費用の低下はカルテルにおいても可能であるとはいへ、それには次の諸條件が必要である。第一は當該カルテルの内部組織が完全であるといふことであり、第二は協定の有効期間が充分に長いといふことである。なほ同じカルテルの中に異つた技術的知識と異つた經驗とをもつた生産者がゐる場合には、自動的に生産が各自の工場に最も適した仕方に配分されることもありうる。そしてその間製品の標準化が行はれるとすれば、それによつて資本と工場との節約が可能であらう。

つきに指摘することの出来るのは、カルテル・メンバー相互間に經驗の交換が行はれるといふこと、また生産條件の改善のため、共同の經費で研究や調査が行はれるといふことである。研究や調査には往々巨額の經費を必

要とし、個々の企業の負擔を過大ならしめる恐れがあるけれども、カルテルの事業として行ふ場合には、この不利は救はれ、企業の間接費の負擔は軽減される。

さらにカルテルは、最良の計算方法をメンバーに教へ、均一の様式で原價計算を行はしめるべく努力する。さうしてその結果は加盟企業相互間の經營の比較を可能ならしめ、ひいて生産の合理化にも寄與する。

最後に指摘すべきは、カルテルが配給費用の低減を齎す點である。カルテルに加入してゐる各企業は、自己の製品の販賣にあたつて同じカタログを利用したり、同じ代理店を利用したりする。なかんづく販賣シンデケートにあつては、共同の販賣機關を設置することにより、配給費および輸送費の低下をはかることが出来る。ただし、販賣シンデケートは商品の引渡しに際し、最も近距離にあるメンバーに注文を振向けることが出来るからである。

以上の諸點は、國內カルテルに關する限り、その費用低下的側面としてしばしば説かれるところであつて、國際聯盟經濟委員の指摘をまつまでもない。従つて問題はむしろ同じことが同じ程度に國際カルテルにも當嵌るかどうかにあるであらう。この點に關する經濟委員の見解は全く肯定的であつて、國際カルテルが費用價格の低下に役立つことを強調してゐるが、それは結局次の如くに要約することが出来る。(1)操業の規則性を高めることによる費用の低下。(2)豫備工場及び不時の需要に應ずべきストックの縮減。(3)生産物の標準化、販賣條件の齊一によるコストの節約。(4)國內市場の確保による不必要な輸送の排除および關稅負擔の軽減。(5)技術的研究、特許權および製造方法、廣告、販賣組織をプールすることによる節約。販賣組織の共同化は中間商人を排除し、配給費の低下を來たさしむ。

國際聯盟の見解は、右の如く國際カルテルの機能をあまりに一般化する嫌ひあるを免れぬが、これに反してエルトルは同じ問題を取扱ふにあたり、國際カルテルの形態の分析から出發する點において、より慎重な態度を示してゐる。¹²⁾ 彼によると、條件カルテルは生産技術のうへに何らの影響をも齎らさない。それは商品流通の外的條件に關するのみ。たゞ市場關係に規律性を與へる限りにおいて、廣義の經濟的合理化に寄與することは認められる。價格カルテルもまた生産過程には直接觸れるところがない。それは本來からいへば、價格引下競争の阻止を目的とするものである。しかし、加盟者に對して一時休息を與へ、その間に技術的改善を行はしめる餘地をもつ。また價格を一定とする關係上、費用の低下によつて収益の向上を圖らんとすることも考へられる。

地域カルテルは加盟者に販路を分割し、その獨占を許すものである。従つてもシアウト・サイダーが存在しないとすれば、加盟者が市場關係に見透しをつけ、需給の適合、價格の安定をはかることは容易である。販路が一定地域に限定されるから、廣告費・旅行費・倉敷料・輸送費等を減少せしめるわけだ。競争のないため、事業改善の刺激を失ふ惧れはあらうが、しかしその代り割當てられた地域を徹底的に開拓し、利潤の増大をはかるに違ひない。生産カルテルにあつては、生産制限による生産費の遞増といふことが考へられる。それは生産の増大によつてコストが引下げられるのと正に逆である。生産制限は、供給量の販賣可能性への適應を意味する。しかも價格の引上げが實現困難であるとすれば、いきほひかへつて生産技術の合理化に驅り立てられるであらう。例へば原料の節約、動力の節約、高能率工場への生産の集中、低能率工場の閉鎖等々。

シンヂケートにあつては、原材料の共同購入、製品の共同販賣が行はれるから、各企業の個別購入、個別販賣に比し、まづ流通過程における費用が低下することは、明かであるが、なほ技術的進歩に與へる間接的影響を看

12) Ertel: l. c. S. 167 ff.

過してはならぬ。シンヂケートに加入せる個々の企業者は、販賣問題から解放されるから、経営内部の合理化に専念することが出来る。収益價格の保障と操業の安定化は、その基礎を與へる。共同試験所の設置、その他によつて、合理化は一層多くの可能性をもつ。しかし、國際カルテルはシンヂケートの形態をとるもの少く、問題とならぬ。利潤分配カルテルは競争の排除、利益の確保により、技術的改善の衝動を弱める。合理化には最も縁遠いカルテル形態だ。しかし、プールのされるのは、基準價格と販賣價格との差額だから、プールしないで済む超過利潤を捻出するため、コストの引下に努力する餘地がないではない。

個々のカルテル形態が技術的進歩または費用の低下に對してもつ意義は、以上によつてほと明かである。もちろん生産制限なり價格協定なりによつて正常利潤をあげることさへ出来れば、より以上の収益増加を望まぬ企業者もゐるか知れないが、しかしカルテル化されるやうな生産部門においては、すなはち巨大な固定資本を擁する典型的な企業者は、さうしたパッシヴな性格をもつことは稀であつて、むしろ經營の合理化に積極的な熱意と關心をもつ。如何なるカルテルといへども、その内外に潜在的競争のないものはない。それは技術的改善を刺戟する。公然たる自由競争のみが技術的改善を促進するやうに考へるのは、誤りである。

そこで我々の考察は一步を進める。國際カルテルにおいて、不良工場の閉鎖による合理化、費用の低下は期待しうるか。この種のことには、國內カルテルにおいてさへ容易ではないが、國際カルテルにおいては一層困難だといつてよい。ベルケンコップがいつてゐるやうに、それは他のメンバーが忠實に協定を遵守するかどうか判らぬからではなく、むしろ國際カルテルの生命はあまり長くないのが普通だからである。否、大工業國においては、アウトルキーの實現、軍事的見地より鍵鑰産業の確保に努めるからである。

最後に問題とすべきは、カルテル・メンバー間に生産分野の協定を行つて、能率の増進を期する所のいはゆる特化、合理化が國際カルテルにおいて可能であるかどうかといふことである。これに對しては、國際カルテルは國內カルテルより一層合理化に適しない、と答へざるを得ない。けだし、國際間にあつては合理的な分業の可能性、特定の生産部門および様式における特化、適地に生産を集中すること等が極めて困難だからである。たゞ、合理化の前提条件を具備せる部門のみは例外をなす。それは技術上の理由よりして集積が充分に進んで居り、國際資本交錯の行はれてゐる部門、換言すれば十九世紀の七八十年代になつて始めて生れたか、或はより若い新興産業部門に外ならない。この種の部門にあつては、他國の經驗およびパテントを交換して二重投資および浪費を避けんとする強い關心をもつ。電球、人絹、そしてある程度アルミニウム、アニリン染料においては、總生産の合理化を目指す協定がある。電球および人絹においては、カルテルの内部に特化が行はれてゐる。

これらの場合における生産および販賣の合理的形成は、個々のグループの間にある程度の資本的結合が存在することによつて可能とされるのである。すなはちカルテル的協定と資本的關聯との非常に弾力的な且つ複雑した混合のうへに立つ。むしろこの種の部門においては、カルテル協定は次第々々に相互の資本的交錯、巨大國際コンツェルンならびに國際トラストに移行する。かくてカルテルはしばしば國際トラスト化への開拓者として現れる。